



夢へ  
向かって  
01

意志あるところに道は拓ける。  
意志ある者こそ道を拓くことができる。  
高潔な志と熱い使命感で  
未来を切り拓く人のビジョン、  
その深淵をのぞく。

国境なき医師団日本 事務局長

エリック・ウアネス

Eric OUANNES

危機に瀕した生命を救う  
果敢なヒューマニタリアン

Text:Yoshie Kaneko  
Photograph:Yukio Yoshinari

紛争や自然災害の現場へいち早く駆けつけ、  
人々に緊急医療を施すのが「国境なき医師団」だ。  
過酷な状況にも決して怯むことのない人道援助の  
プロフェッショナル集団、そのリーダーが語る未来とは。

20代の終わりに人生の意味を自問。  
大企業の安定を捨て、NGOへ飛び込む

水道の蛇口をひねれば澄んだ水が流れ、スーパーマーケットや飲食店には豊富な食料が並び、病気や怪我をすれば病院で手当てをしてもらえる。これは日本ではだれもが等しく享受できる、当たり前の現実だ。しかし世界に目を転じると決して当然のことではない。

例えば、栄養失調で亡くなる乳幼児は世界で年間約500万人に達し、アフリカでは30秒に1人の子どもがマラリアで死亡している。また、HIVに感染している15歳未満の子どもは世界で約210万人いると見られ、うち90%がアフリカに集中している。現在、途上国全体で合計200万人がHIVウイルスの増殖を抑える治療を受けているものの、治

療を緊急に必要としている患者は500万人に上る。

生きるか死ぬか、そんな瀬戸際の暮らしは途上国だけに限られたものではない。頻発する自然災害も大きな脅威だ。2009年だけでも、中国・四川省、インドネシア・スマトラ島沖、サモア諸島沖で大地震が発生したし、フィリピンやインドでは洪水が起こった。今年1月にはハイチで強い地震が起き、首都ポルトープランスは壊滅的な状況に陥った。それぞれの地で多くの人々の生活が破綻に追い込まれたのである。

こうした危機に直面する現場で人命を救うべく奮闘しているのが「国境なき医師団(MSF:Medecins Sans Frontieres)」だ。1971年、フランスで設立された民間の医療・人道援助団体である。医師、看護師をはじめとする4600人以上の海外派遣スタッフが、2万4000人の現地スタッフとともに、世界65か国で援助活動を展開(2008年度)。ハイチでも地震直後から緊急医療活動を行っている。

現在、支部は19か国に広がっている。その中の1つ、日本支部の事務局長として采配を振るうのがエリック・ウアネス氏だ。

1967年、イランとベルギーという複数のルーツを持つ父とフランス

人の母との間に生まれた。「インターナショナルな雰囲気のある家庭で育ったことに加えて、父がユネスコで働いていたこともあって、グローバルな志向が自然と養われました」と振り返る。

大学院でマネジメントとロジスティクス・エンジニアリングを学んだ後、いったんはフランスの大手石油会社に就職した。収入は安定しているし、年数が経てば昇進も見込める恵まれた環境。しかし、この揺るぎない安定こそが彼の心に疑念を抱かせた。

「20代の終わりになって、『ここにおいて、将来、自分自身を褒められるようなことを成し遂げられるのだろうか』と自問したんです。答えは『ノン』。自分が本当にやりたいことは、広い世界に飛び出して、人のためになることをすることだと気づきました。NGOに行くことはキャリアにプラスになるとも思いましたしね」

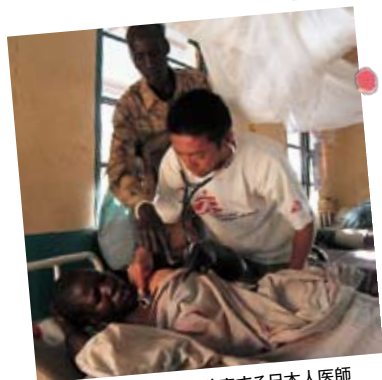
ウアネス氏いわく、昨今のNGOにはプロフェッショナリズムが浸透し、組織も合理的に運営されているとのこと。国境なき医師団でも目標を立ててプロジェクトを推進し、成果を挙げるのが重視されている。つまり、世間で思われているほどには、会社組織とNGOに大きな違いはないというのだ。「確かにサラリーは低いかもしれないし、大変なこともあります。でも人を助けることの意味は大きいし、大学院にまで行ってマネジメントやロジスティクスを学んだ自分の専門性を高めるという意味でも、NGOへの参加は魅力的に映りました」

こうして29歳で、飢餓問題に取り組むフランスの非営利組織「アクション・アゲインスト・ハンガー」に参加。財務管理者やロジスティシャン（物資調達担当者）、プロジェクト管理者などとしてアフガニスタン、ブルンジ、ロシア、ソマリアといった国々で経験を積んだ後、さらに活動の幅を広げようと02年にMSFへ転身した。MSFではアフガニスタン、シエラレオネ、コンゴなどで活動責任者を拝命。日本支部の事務局長に就任したのは05年のことだ。

大会社の安定を捨てて13年。「後悔はまったくありません」と語る表情に気負いはみじんもない。「ヒューマニタリアン（人道援助）の世界で働き始めてすぐ、これが自分に合っている道だと感じました。その思いは今このときも変わっていません」と明言する。

### 深夜に爆音が響くアフガニスタン。 ブルンジでは腕を失った子どもたちが…

とはいうものの、MSFの派遣先は紛争や災害の最前線だ。任務の遂行は容易ではないし、死と隣り合わせになることも少なくない。



スーダン南部で患者を診察する日本人医師



リベリアで子どもの治療にあたる日本人医師



ケニアで活動する日本人看護師

例えば、ウアネス氏が1997年に訪れたアフガニスタンでは、常にどこかで爆撃や銃撃があった。深夜、爆音で目が覚めることもしばしばだったという。「それでも私たち派遣スタッフには帰るところがあります。しかし現地の人にとってはそこが故郷であり、生活のベースなんです。危険な場所を去ることができる、安全な場所に戻れるということは極めて贅沢な特権なんだと痛感しました」

内戦が続くソマリアでのミッションも衝撃的だった。

「街はまるっきり廃墟でした。すべてが破壊され、建っている建物は一軒もない。あたりはロケット弾や爆弾だらけ。食べ物や飲み物も満足に口にできません。でも、そういうところでも人は生きていかなければならない。ソマリアの人の平均寿命は男女ともに40歳代です。これは内戦で亡くなる人が多いだけでなく、不衛生な環境のため、病気で亡くなる方が多いということでもあります」

ブルンジでのミッションはさらにショッキングだった。激しい民族対立で大虐殺が行われた国である。虐殺者たちに親を殺され、刃物で耳や腕を切り落とされた子どもたちは食事を摂るに摂れず、衰弱していくばかりだった。そこでは栄養面をふくめた、被害に遭った子どもたちの治療に当たったのである。

「彼らの回復はめざましく、数ヶ月後にはサッカーで遊ぶまでになりました。少しずつではありますが笑顔も戻ったんです。こういう結果を出せると自分たちがしていることの意義を感じられるし、どんなに過酷なミッションでもまた頑張ろうと思えます」

我々日本人の想像を絶する、切羽詰った状態に否応なく立ち置かれた人々。MSFはそんな彼らの1人でも多くに手をさしのべようと、現地の人と一緒に治療を施し、栄養面でのケアも行っている。人が人としてまっとうに生活していくための選択肢を増やす、そのための活動を地道に続けているのである。

### 資本主義は転換点にある。 問われるのは「世界市民」としての自覚

各地で着実な成果を挙げているMSFだが、その活動の根底には個人の寄付、さらに物資・資金の提供という形での企業の協力がある。彼らの活動は社会のコミットメント（関与）に支えられているのだ。ウ



流通されるよう、製薬業界、国際機関、研究機関などに働きかけている。それでも状況の改善はまだ道半ばだ。

こうした現況を踏まえてウアネス氏が期待をかけるのは、日本の人々、日本の企業だという。

「日本政府は国際社会で存在感を放っています。国連に対する資金供与枠は大きいし、外交官も国際機関に数多く派遣していますね。ただ、市民社会という観点でいうと物足りなさを感じます。もっと日本の市井の人々や民間企業にヒューマニタリアンの活動を認知してほしいし、実際に参加もしていただきたい」

日本の企業では、CSRに「環境」という文字はあっても「人道支援」の文字が見られることは少ない。これは日本社会にまだ人道支援が根づいていないことの象徴ではないかとウアネス氏はいう。

「日本の文化やそこに住む人々の気質は我々外国人にとって尊敬すべきもので、学ぶところもたくさんあります。ヒューマニタリアンへの理解も、もっと得られるものと私たちは期待しています。ですから、まずは世界へ目を開くことを意識してほしい。そこから未来は変わっていくと思います」

日本の市民であるということ以上に、自分たちは世界市民の一員なのだという意識を持つこと。それこそがMSFの活動を後押しするだけでなく、世界の現状を、ひいては世界の“これから”を変える力になる。そう、ウアネス氏のいうとおり、未来は私たち自身の手でいかようにも変えることができるのだ。

アネス氏はしかし、世界の窮状を変えるにはさらなる広い裾野での協力が必要だと訴える。

「ここ数年でCSRは企業のメインテーマになりつつありますし、社会起業家を目指す若者も増えています。資本主義は転換点を迎えていると思います。これからは企業も個人も、ただ利益を追求するだけでなく、人間そのものを尊重する方向へ歩んでいくべきではないでしょうか。先進国は途上国の人々の声にもっと耳を傾け、富の分配について真剣に議論すべきだと思いますね」

MSFが重視する問題の1つは医薬品だ。世界の医療研究費の90%が、心臓疾患や肥満など世界の10%に満たない人々の健康問題に費やされている。また、1975年から2004年の間に世界で販売された新たな化学系医薬品のうち、熱帯病や結核の治療に関係するものはわずか1.3%のみだったというデータもある。熱帯病や結核は、疾病負担全体の12%に相当するにも関わらず、だ。

資本主義においては、企業が利益を追求し、儲かる分野により多くの研究開発費を投じるのは致し方ないことだろう。しかし、それでは救えるはずの命が救えない。経済力が生死を分かちようなことがあってはならないと、MSFはこの問題に警鐘を鳴らし続けている。

HIVを始めとする熱帯性疾患についても、毎年、日本を含む先進国で特許新薬が次々と開発されるものの、そうした薬をもっとも切実に必要としているアフリカなど途上国では高価すぎて手に入れることができない。そこでMSFは特許のないジェネリック医薬品がもっと

## PROFILE

エリック・ウアネス 1967年フランス生まれ。エセック経済商科大学でマネジメントおよびロジスティクス・エンジニアリングを専攻し、修士号を取得。フランスの民間企業を経て、97年、飢餓問題に取り組む非営利組織「アクション・アゲインスト・ハンガー」に参加。2002年より「国境なき医師団」に活動の場を移し、アフガニスタンやシエラレオネ、コンゴなどでの活動責任者を務めた後、MSF韓国事務所代表を経て、05年より現職。



### 国境なき医師団

MSFでは世界各地への派遣スタッフを求めているほか、個人からの寄付、企業・団体による資金・物資提供支援も受け付けている。詳しくはMSFのホームページにて確認を。

<http://www.msf.or.jp>